武蔵野美術大学建築学科・日月会

フォルマ・フォロ

Forma-Foro

Nov.1. 2003

vol.4 第4号

目次

フォルマ・フォロ エッセイ
長谷川 堯

インタビュー
竹山 実・保坂 陽一郎

卒業生の素顔
赤星 文比古

VOICES /
一夜亭と縄文建築団
大鳩 信道

製図室 /
アートサイト岩室・小千谷に参加して
瀬山 葉子　坂東 通世

追悼 /
芦原義信先生を偲んで
児島 学敏

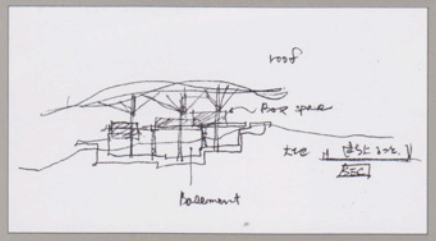
表紙写真：
左「武蔵野美術大学10号館」1981
（共同設計：寺田 秀夫）
写真提供：古館 克明
右「武蔵野美術大学図書館第2期工事」1977
写真提供：新建築写真部

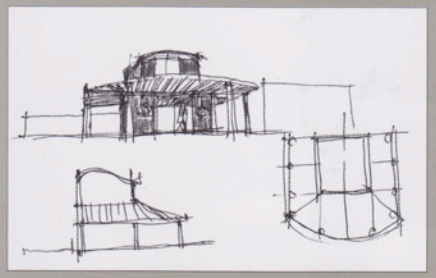
建築よ芸術であれ

長谷川 堯　HASEGAWA, Takashi
武蔵野美術大学教授

大正時代の初めの日本で、「建築は芸術か、否か」、という問題をめぐって、建築家たちの間で熱く真剣な議論が闘わされた。しかしこの論争は、その後、近代合理主義建築論が入ってきた後はほとんど聞かれなくなった。「芸術」か否かはともかく、建築はまず技術であり経済であり、さらにいえば「建築は所詮、建築なのだ」というわけである。「建築は建築だ」という時には、言外に「建築(学)は工学だ」、という主張が強く含まれている。逆に、建築が表現芸術の世界に深く関わる存在である事には触れまいとする意図も感じられる。

美大系の建築学科が苦戦している。少子化による受験生の減少と、建築を目指そうとする学生数自体の低下のなかで、芸術系の私立大学の建築学科での受験者数の落ち込みに歯止めがかからない。武蔵美の建築も残念ながら、こうした現象の埒外にいることはできないでいる。「所詮、建築は工学だ」という根強い考え方が投影した結果でもあるだろう。その意味でも、武蔵美出身の設計者たちに、ここはもうひと踏ん張り頑張って貰うしかない、としきりに思う。しかし、「これが芸術だ」、といわんばかりの奇矯な形や空間をもつ建物をどんどん発表しろ、というのではない。工学部系の建築家たちには思いつかないディテールや姿をもつ建築を造って、そのすばらしさを人々に納得させてもらいたいだけなのだ。武蔵美で学んでいた頃に、自分の仲間たちと共有していた表現者としての＜熱気＞といったものを見る者に感じさせるような設計をして、味も素っ気もない今の建築界に投じて、彼らの目を覚まして欲しい。そうした試みの中で、建築が工学の領域を超えて芸術の世界にたしかに踏みこんでいる・・・、そんな場面に出会いたいのだ。





スケッチ　保坂陽一郎

武蔵美建築のゆくえ

竹山 実・保坂 陽一郎
TAKEYAMA, Minoru・HOSAKA, Yoichiro
武蔵野美術大学教授

まずお二人には、武蔵野美大に来る前のことから話を伺いたいと思います。
竹山先生は1959年にハーバードの大学院へ留学されました。当時のハーバードについて話して頂けますか。
竹山：1959年のハーバードでは、アーバンデザインという時代に入りつつある時で、建築学科でもアーバンデザインの課題が多くありました。当時MITでは丹下さんが教えていた。２年後には東大に都市工ができた。そういう時代でした。ハーバードではグロピウスは退官していました。僕がクリティックで印象深かったのは、ルイス・カーン。当時はまだ有名ではなかったけど、丹下さんから面白い建築家だよと教えてもらいました。その他にはギィーディオン、セルトなども来ていました。

ハーバードを出てから4年余り、アメリカ、ヨーロッパで暮らしておられました。その間の話を。
竹山：話すと長くなるけれど、その辺のことは、タイトルはまだ決まっていないのだけれど10月を目指して本を出すつもりです。(＊編集部註)

1964年に帰国され、事務所を設立され、1965年には武蔵野美大においでになっています。その間のいきさつは。

竹山：今から思うとデンマークにいる時、芦原さんがたびたび来られて、「今度学校をつくるけど君来ないか？」といわれていたのがきっかけだと思います。帰国するとすぐに呼ばれてここに来ました。だけど僕は早稲田の出身だから早稲田にも呼ばれていて、最初の頃は両方行っていました。いつのまにか、ムサビだけになってしまいましたが。（笑い）

保坂先生は1957年に東大を卒業され、芦原事務所にお入りになりました。芦原事務所に入ったきっかけは何でしょうか。

保坂：僕は芦原事務所を受けて落ちたのですよ。一緒に受けた芸大の人が受かった。それで東大の大学院に行っていたのだけれど、やはり仕事がしたくて、もう一度頼みに行って入ったのです。　芦原さんに興味をもったのは、芦原さんは当時、中央公論にあった食堂で、「アスパラガスとカズノコを注文して美味しそうに食べていた」という新建築の記事を読んで、おもしろい人だなぁーと思い、会ってみたくなった。それが芦原さんを知るきっかけです。

保坂先生は芦原事務所には10年近く在籍されましたが、その間に担当されたお仕事はどんなものだったのでしょうか。

保坂：芦原事務所には9年いました。結構楽しませてもらいました。ソニービルとか。ムサビのアトリエ棟とか。モントリオールでの万博のパビリオンとか。

そのムサビのアトリエ棟ですが、何でキビダンゴというのですか？

保坂：岡山のキビダンゴの箱は、仕切りが井桁に組んであり、その中にダンゴが入っている。その仕切りに似ていたからでしょう。アトリエ棟については設計の過程でいろいろあって、油絵科の先生とチャンチャンバラバラをやったのです。実は今のアトリエ棟の案の前に、ヨットの帆のような案があった。ただその案だとアトリエの内部空間が真四角ではなかった。すると「部屋がゆがんでいるから絵が描けない」と油絵科の先生が言い出した。それで1／2の模型までつくって頑張って説得したけど駄目で、今の案になったのです。

1967年に芦原事務所をお辞めになって武蔵野美大においでになりましたが、いきさつなどを話して下さい。

保坂：芦原事務所にいながら何となく武蔵野美大にもいたという感じかな。ですから、僕は芦原事務所を辞めていないのです。だって送別会をしてもらっていないもの。

芦原先生は日本でハーバードのような建築学科をつくるというのが理想だったと聞いていますが、実際に武蔵野美大の建築学科は当時どのように見えましたか。

竹山：ハーバードに限らず、日本以外の国の建築教育のシステムは、日本のそれとかなり違っていました。だから日本のシステムを変えていかなければならないという意欲はあったと思います。具体的には、美術大学のなかに建築学科をつくるということ。そして建築学科でデザインを主体にすること。さらに学生の作品に対する意見を公開しようということで、時にはゲストを招いて講評会をやり始めた。恐らくこれは日本では初めてではないだろうか。いろい

ろなレベルで学生との交流を図ろうとしていたのだと思います。実際、学生達とは7号館でよくバーベーキューをしました。

お二人とも武蔵野美大の建築学科で教えてこられて、４０年ちかくになるかと思います。その間で、もっとも印象に残っていることは何でしょうか。

保坂：昔は古美術研究会というのがあって、僕は最初に3回生を連れて行きました。それがきっかけとなって学生達と旅行へよく行きました。特に２０人位を連れて、東ヨーロッパへ行ったのはおもしろかった。今でも夏のゼミ旅行はやっています。あとムサビ主催で長谷川堯さんや向井周太郎さんと一緒にやった「ブルーノタウト展」などは印象深い思い出です。

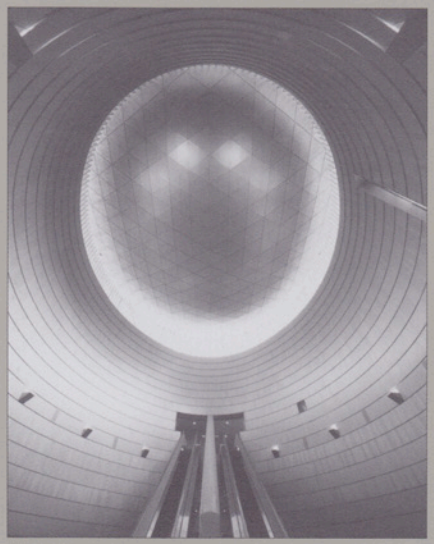
竹山：僕が特に印象深いのは、僕が50才の時、ゼミの学生が誕生日を祝ってつくってくれたビデオで、学生達が僕のことをそんなに思ってくれていたのかと、すごく嬉しかった。もうひとつ、10号館を設計した時。自分の家を設計する時、感慨があるでしょう。それに似た気持ちで設計したことを憶えています。元々、あそこには建築学科が入る予定だったので、そういう気持ちがなおさら強かったと思います。

今、お二人がお辞めになることも含めて、武蔵野美大の建築学科は大きな転機にいるように思います。ここの建築学科がこれか

らどうしたら良いのか、意見をお聞きしたいのです。

保坂：直接的な答えになっていないけれど、この間、坂本先生と話していて、「ムサビの建築学科はユニークだと思う」と言っていました。これからもどんどんとユニークになってゆくと思うのだけど、流されないように、何が本質的で、何が大事なことかを考えてゆけばよいと思います。

竹山：ユニークさをどうやって保つか。日本の教育全般の問題として、国家的にワンウェイの方向にコントロールされすぎていると思う。大学はまず自由でなくてはいけない。建築教育に限っていうと、東京に建築学科が３０もあって多すぎる。だから将来的にユニークな大学が幾つか一緒になってひとつの大学をつくる。M&Aかな。つまり、個々の大学がどうやって生き延びるかという視点もあるけれど、日本の大学の教育、建築教育はどうあるべきかという視点を持つ必要もあると思います。そうした点からこの大学を見ると、ユニークなのは美術大学に籍をおいているということでしょう。僕達２人がいなくなって、実際にものづくりをしている人が減ってしまうことが気掛かりです。建築に限らず、ものをつくる人の心の連帯が不足している。それを育てることをわきまえていかないと大変なことになりそうだなと思います。そこのところを救うのは同窓会。頑張って下さい。



横浜市北部方面斎場　2002　　写真提供：藤塚 光政

いつの時代もそうだったかもしれませんが、今は建築を成り立たせるのが難しいように思います。ひとつは景気が悪くて仕事があまりないからですが、そうした状況をどうお考えですか。

竹山：確かに仕事量が減っている。ただ実際につくることだけが建築じゃない。こういう不況の時代に何をしたらよいか。勉強すること。蓄えを持つこと。そして将来に備えることです。

保坂：僕は今、しばらく振りに住宅をやっています。例えば一軒の住宅の設計だと3ヶ月でもできるけど、３年かけて設計することもできる。ひとつの設計を長く、突っ込んでやることは幸せだと思う。仕事が減ることは、ある意味では良いことかも知れない。ひとつの仕事に長い時間をかけて、心ゆくまで仕事を味わうことができる。好きなことをやっていることが一番楽しいのだから。

さて、お二人は長い間一緒に建築学科で教えてこられましたが、お互いをどう見ていらっしゃるのでしょうか。とてもタイプが違うように見えますが。

竹山：同床異夢という言葉があるけど、学校で教える人というのは、そういう人が集まらなくてはいけないと思います。いろんな考え方の違う人があって、接触する学生達に、いろんな考えがあるということを知らしめなくては。僕と保坂さんはそういう意味では好対照だったと思います。

富士の納骨堂　1982　　写真提供：新建築写真部

保坂：30歳の終り頃、悩んだことがありました。大学を辞めて、もっと仕事をするかなと。それで、竹山さんに相談したら、大学で教えることは、自分にとっても大事だと励まされました。その時のことは、今でも感謝しています。それと、大学のことで大事なことを決めるときは、不思議に意見が一致していました。

竹山：僕達が辞めたあとに残る先生達にはそういう意味でちょっと心配しています。同じ蒲団で同じ夢を見てしまうのではと・・・・・・・。

今日は長い時間どうもありがとうございました。

2003年6月19日　武蔵野美術大学建築学科研究室にて

インタビュアー:須藤和由、青山恭之、林美樹

＊文中に出てきた竹山先生の著作は『そうだ！建築をやろう－修業の旅路で出会った人々』〈彰国社刊〉となりました

芦原義信先生を偲んで

児島 学敏　KOJIMA, Gakutoshi
1回生　武蔵野美術大学講師

9月24日の早朝、武蔵野美術大学名誉教授であられた芦原義信先生が亡くなられました。芦原先生は1964年（昭和39年）、武蔵野美術大学の造形学部産業デザイン学科に建築デザイン専攻が新設されるのを機に、主任教授として赴任され、東京大学を間にはさんで通算で16年、武蔵野美術大学に在籍され私たち後進の指導にあたられました。先生の授業は、学位論文である「外部空間の構成-建築から都市へ」を教科書として、欧米の都市の美しさをどのような方法によって日本の乱れた街並みに適応できるかを熱心に講義されました。

また芦原先生は学内外を問わず様々な場所に私達学生を招き、分かりやすい言葉で、建築家は「社会と深く関係を持たなければならない」、「手を動かして物を考えること」と叱咤激励し、将来へのインスピレーションを与えてくれました。私はその後、先生の主宰する芦原建築設計研究所に入所させていただき、三十数年を一卒業生として設計の実務や、研究テーマである「街並みの美学」を担当させていただきました。北海道から沖縄まで、仕事を通じて訪れた町々での先生との会話は、学生時代お招きしていただいた先生のご自宅の芝生の庭での記憶が原風景として甦り、私の中でずっと生き続けています。芦原先生のご冥福を心からお祈り申しあげます。

一夜亭と縄文建築団

大嶋 信道　OSHIMA, Nobumichi
17回生　大嶋アトリエ

1月14日の早朝、事務所の電話が鳴った。湯河原の不東庵工房の施主である細川護熙さんからで、「フランスのシラク大統領が3月中旬に来日する。可能ならそれまでに茶室を完成させ、もてなしたい。至急、藤森（照信）先生と一緒に打合せしたいのだが。」という話であった。

藤森先生とは、東大生産技術研究所の教授で専門は建築史。私は1984年に大学を卒業してから6年間中堅ディベロッパー系列の施工会社に勤務後、建築の歴史を勉強しようと藤森研究室の門を叩き、4年間在籍していた。そのころから藤森教授は、建築の設計を手がけるようになり、設計事務所を立ち上げたばかりの私に共同設計をしないかと声をかけてくれた。

最初に完成した“ニラハウス（ｊｔ’97.8）”をはじめ、“一本松ハウス（ｊｔ’99.1）”、“ツバキ城（新建築’01.6）”、“不東庵工房（新建築’01.10）”と続く一連の建物は共通して縄文建築団が仕上げ工事に参加している。

縄文建築団の作業風景（上足場の中央右は赤瀬川さん、中央左は南さん、窓右が藤森先生）

縄文建築団とは、“施主、設計者および友人知人によるボランティア工事グループ”であり、この建築団が施工することで、プロには出せない素人ならではのテクスチャーを出し、祝祭的かつスポーツ的に工事を楽しむことができるのである。

さて茶室の工事は、ナラの丸太杭の上に、俳優座の大道具に作ってもらったパネルを組み立てるというプレハブ工法を採用することにより、短工期を達成できるようにした。工場で作った床、壁、屋根のパネルの組み立ては2月25日。一日で組み上がったこの茶室は、細川さんにより“一夜亭”と名づけられた。

躯体ができたところで縄文建築団の出番となる。今回の縄文建築団の仕事は、内外の左官仕上げと屋根の杉皮葺がメインである。3月8日、9日の両日、16名の参加者が約3畳の茶室の屋根、壁、床下に蟻のように群がって工事に勤しんだ。参加者には、施主の細川さん、藤森教授を始め、ニラハウスの施主である赤瀬川原平さん、そして南伸坊さん、林丈二さん他常連メンバーがいた。

縄文建築団については、私の事務所が工事に関わる全てを手配している。作業に使う建材、工具のみならず、お昼の弁当や夜の宴会、宿泊の手配まで。昔、勤め先で工事現場の監督をしていた経験が、こういうところで図らずも役に立っている。

イラク戦争のため、シラクさんの来日は中止になったが、一夜亭（新建築’03.7）は3月末に完成し、4月6日に茶室開きが無事行われた。

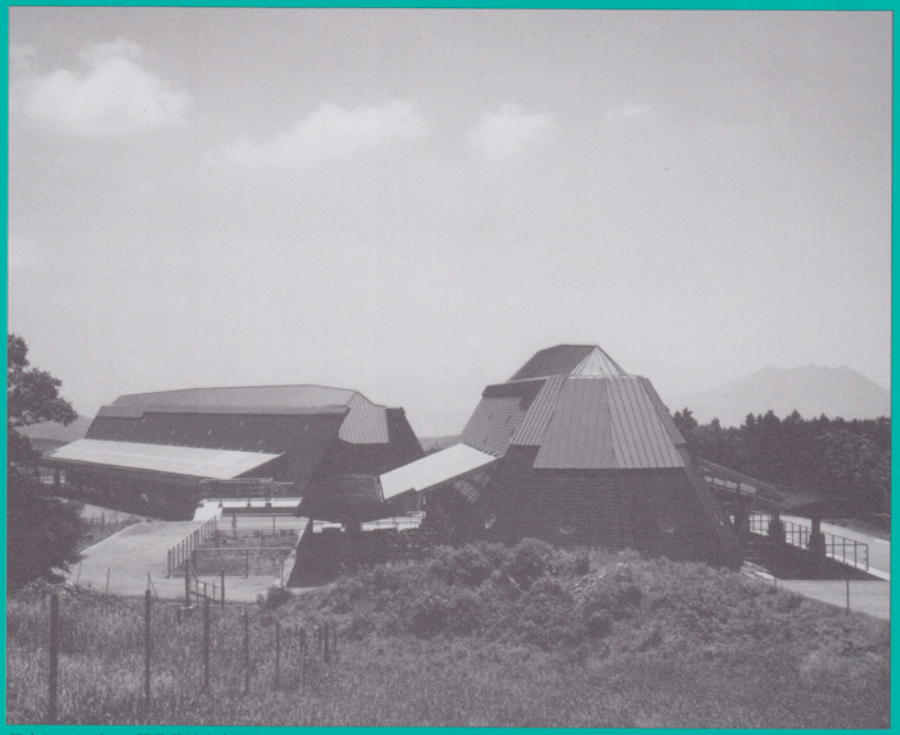
一夜亭　2003

縁は巡って

赤星 文比古　AKAHOSHI,Fumihiko
18回生　赤星文比古建築都市設計研究所

ヴェネツィアを強く意識したのは、大学院に進む前の春休みだった。当時、竹山研究室では、ヴェネツィアビエンナーレのアカデミア橋プロジェクトが進められ、みんなで手分けしてカナルグランデ（大運河）に架かるアカデミア橋周辺の敷地模型を制作した。この時、霧に煙る水の都ヴェネツィアのイメージが、具体的なスケールを把握すると共に不思議な魅力を浮かび上がらせ、この水上迷宮都市へ引き込まれていった。

のちにヴェネツィア建築大学へ留学し、いつしかヴェネツィアが訪れてみたい憧れの街からユートピアとなった。10年近く日本と往復しながら、 生活においても仕事においてもイタリアとの大きなギャップを享受しながら、ついにヴェネツィア建築大学を卒業することになろうとは、この頃思いも寄らなかった。



熊本アートポリス阿蘇草地畜産研究所（トム・ヘネガン他と共同設計）　1992　　写真提供：松岡 満男

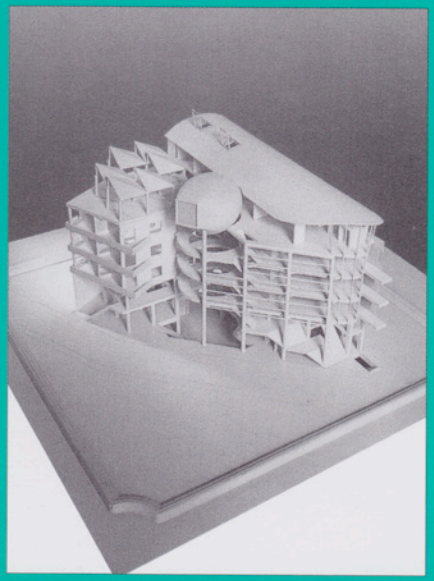
ムサビ時代はとにかく楽しかった。よき同級生と出会い、文字どおりよく遊び、よく学んだ。そして今思えばムサビ時代に留学する布石があった。芦原義信先生を始め、竹山実先生、保坂陽一郎先生、長谷川堯先生等から海外の情報と共に建築を教わった。学生達は、誰しも話に出てくる建築を実際に見てみたいと思ったに違いない。そんな影響で、いつも図書館に行っては、日本より海外の建築誌ばかりを見漁っていたのを思い出す。

大学院時代には竹山先生が教えるカリフォルニア州立大学バークレイ校に院生4人で同行した。バークレイ校の大学院生と設計課題を一緒にやって、ますます留学熱が高くなった。一緒に行ったひとりは、この時知り合った中国系アメリカ人建築家と恋愛熱が高まって後に結婚して現在アメリカに住んでいる。私は大学院時代のアルバイト先だったSKM設計計画事務所の松永安光先生（当時、ワシントン大学で教えていた）とサンフランシスコ郊外でばったり出会う。そんな縁もあって、大学院を終えた後、SKM設計計画事務所にそのまま就職してしまった。

その後退職し留学準備をする間、同級生の安藤和浩君と一緒に外国人建築家達と仕事をする機会を得た。まず、元アーキグラムのピーター・クックとクリスティーヌ・ホーレイと共に、「国際花と緑の博覧会」のフォリー#5の仕事をしたのは夢のような話だった。彼等は大学時代に見漁っていた海

外建築誌の中でのヒーローだった。次に、トム・ヘネガンらと熊本アートポリスの阿蘇草地畜産研究所の仕事を東京の品川にアーキテクチュアファクトリーを設立して始めたり、留学するまで外国に縁が深く仕事は充実していた。

91年イタリア政府給費留学生試験にパスし、いよいよイタリア行きが決まった。ヴェネツィア建築大学へ留学したのは、街の魅力もさることながら、大学の教授陣に当時イタリアを代表する名前が揃っていた。グレゴッティ、ロッシ、ダル・コー、スコラーリ等。中でも一番楽しみにしていたのは、今は亡きマンフレッド・タフーリ教授であった。著書の「建築神話の崩壊」や「球と迷宮」等は示唆的でとても共感する記述が多かった。彼の授業は常に溢れんばかりの学生で、休憩以外はずっと雄弁で熱のこもった話が続き、しばしば終了のチャイムが鳴っても続いた。学生達は、その講義を黙々と熱心にノートにまとめていく。私



ミラノコンプレックス
（ヴェネツィア建築大学設計課題）　1992

BASKE-T-BOX　1997

と言えば、断片的に解った文章やキーワードを列記し、後で繋ぎ合わせて行くが、なかなかつじつまが合わず100%解らないのが残念で仕方なかった。しかし、これまで体験した授業にない独特の雰囲気を印象深く覚えている。

ヴェネツィアでの生活は、様々なイベントで飽きることはなかった。カーニバル、レデントーレの花火大会、ゴンドラレースや映画祭。ヴェネツィアビエンナーレ芸術展と建築展では、日本館展示の仕事を手伝っていたので、著名人達とも出会い大いに刺激を受けた。一緒に仕事をしたクックとも建築展で再会を果たした。また、暇を見つけてはよく建築行脚に出かけた。出発前には必ずムサビ時代に習った先生達の著書をもう一度目を通して出発したものだ。そして実際目の当たりにする街や建築はいつも想像を遥かに越えていた。

さて、持ち回りか今では私が大学や専門学校の非常勤講師として教える立場にあり、30カ国あまり建築行脚して撮ってきたスライドを使いながら授業を進めている。最近、最初の授業はチュニジアのマトマタの洞窟住居の話から始めるのであるが、もちろん保坂先生の「まもりのかたち」も引用している。結局、巡り巡ってムサビ時代からヴェネツィア建築大学に至るまでの多くの良き恩師から教わったことを次の世代に伝えているのである。

同級生の眼

安藤 和浩　ANDO, Kazuhiro
18回生　アンドウ・アトリエ

彼は常に同級生を誘導するリーダー的な存在だった。制作課題の中盤ともなると彼が住むアパートの一室が夜毎に友人の集いの場となった。そこで出会う目指す分野の違う友人や刺激的な情報は絵画・彫刻・演劇などをクロスオーバーするものだった。彼の作品にはそんな背景から滲出するものがあり、課題という表現上のフレームを透かして立上がる何かが重要であることに気づかせてくれた。

89年から彼と共に外国人とのパートナーシップを組む機会を得て、事務所を共同で立ち上げた。4人がセンターテーブルに揃うと英語と日本語、場が高揚してくるとアイスランド語、彼が勉強中のイタリア語が飛び交う。自分のスケッチを見せ、なぜこんな風になったか、そこへ至る論理的プロセスを訴える。一人ひとりはオーソドクスで地味な案を持ち寄っても、異なる価値観の中で生まれたアイディアを重ね透かしてみると、とんでもなく革新的な形態が浮かび上がる。滴る汗をトレペに落とさない様、首に巻いたタオルで拭いながらドローイングボードに向かう、そんな日々だった。

スレート1枚の外壁と鉄骨のクロスブレースに覆われた、我々の事務所は倉庫としては地味な造りであったが、仕事場としては肉体的にも観念的にも刺激に溢れていた。

アートサイト岩室・アートサイト小千谷に参加して

瀬山 葉子　SEYAMA, Yoko
武蔵野美術大学4年

3年生後期に設計計画の源コースで手がけた作品を今年の3月に新潟の岩室、8月には小千谷にて展示・発表する機会がありました。その都度少しずつ発展させながら、気が付けば1年近くこの作品との付き合いが続いています。この作品のおかげで、私は様々な人や時間や空間との出会いをしてきました。新しい空間との出会いはまさにハプニングで感動的です。自分と空間との対話の中でどのようにそれらが新たな姿へと変わっていくのか、そのスリルに少々はまってしまっています。私はそんな出会いとともに、外から眺めるためのオブジェ的な空間ではなくて、中に入って身体の感覚が繊細になるような、あるいはその感覚を思い出させるような空間がつくれたら素晴らしいと思います。時や光を意識しながら・・・。

アートサイト岩室　2003

学生のアイディアを地域に活かす

板東 通世　BANDO, Michiyo
3回生　BANインターナショナル

学生の力を借りたい...という依頼主の動機には2通りある。1つは、地域コミュニティーという公の課題にあって解決の見通しがまるで立たない、という悲観的状況から脱出への期待。そしてもう1つは、現在抱えている課題より重要な何かを見落としているのではないか、という余裕から。2002年5月の新潟県岩室村からの依頼はどうやら第二番目のようだ。

長尾ゼミの13名が岩室探検隊を結成し、5月に合宿調査を行った。それはその時の調査・発表を元に、様々な立場の人々からの意見を取り込みながら膨らまして、最終的には卒業製作としてまとめあげるというものであった。「アートサイト岩室2003」は、この時の探検隊によって提案された企画の一部を実施した成果である。

「アートサイト小千谷2003」のきっかけは実に単純で、岩室の事をテレビで知った小千谷市の食品関連企業の社長の学生への差し入れから始まる。元気のない小千谷市をもっと活性化したいという一民間企業が市当局を動かし、美味しい食べ物で学生の心をつかんだわけだ。これは一番目の動機によるものではないだろうか。官民一体とは「言うは易し、行い難し」だが、小千谷はまさに官民学が一体となって実現できた稀なイベントと言える。

坂東氏はこれらのアートイベントのコーディネーターである。「アートサイト岩室2003」では卒業制作を中心に旅館で展示を行い、「アートサイト小千谷2003」では長岡造形大の協力も得て、テキスタイルを中心にしたインスタレーションで木造3階建の割烹料亭を異空間に変貌させた。（編集部）

◎ 今年は武蔵野美術大学に建築学科が設立されて４０周年にあたります。そうした中、設立当初から学生を指導してこられた竹山実教授と保坂陽一郎教授のお二人が、今年度限りで退任されます。また建築学科の設立に多大な御尽力をされた芦原義信名誉教授が先日お亡くなりになりました。４０周年を迎え、武蔵野美術大学の建築学科は、はからずとも大きな転機を迎えようとしています。この大転機にあたり、建築学科では、幾つもの行事が計画されています。会員の皆様、ふるってご参加ください。（須藤和由）◎39年、37年という年月の間に竹山実先生、保坂陽一郎先生から教えを受けた学生の数は建築学科の全卒業生数にほぼ等しい。◎直接の講義を受けずとも、メディアにのった作品を見て影響を受け、建築を志した人間も多いであろう。◎学生とのつきあいはお二人のエネルギーの源泉であったとのこと。いやいや、いまでも学生よりよっぽどエネルギッシュでいらっしゃる。もしや、これからは設計にもっと集中できると意気込んでおられるのでは？◎仕事が少ない時は逆に設計に時間をかけ、知的貯蓄をする・・。そうしたいものだ。しかし、あしたのご飯は？年金もろくに貰えない世代はどうしたらいいの？？(M.H.)

「建築祭2003-2004」でのOB作品展へは、多数の方々の参加をお待ちしております。
参加の詳細はホームページを御覧下さい。
（www.nichigetsu .org）

フォルマ・フォロ
Vol.4 2003.11.1

編集：林 美樹、須藤和由、青山恭之、古川泰悟
デザインフォーマット：矢萩喜従郎

印刷：株式会社 帆風
発行：武蔵野美術大学建築学科同窓会・日月会
http://www.nichigetsu.org
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学建築学科研究室内